

表現の意味について

三木那由他*

1. 序論

言語の本質的な特徴のひとつは意味である。すなわち、言語表現は何かを意味するという決定的な性質を持つ。20世紀後半の哲学者グライス(H. P. Grice)はこの意味という概念を取り上げ、それを心理的な用語によって分析した。これは意味というものの自体を分析対象とする数少ない理論のひとつであるとともに、物理主義や言語に関する自然主義との関連でも重要視され、さまざまな論者に影響を与えた⁽¹⁾。だが、この理論にはいくつかの難点がある。とはいえこれまで指摘されてきた多くの難点は、言語や表現の意味の分析に直接関わるものではなかった。これに対し本稿では、言語や表現の意味の分析に関するグライスの不備を指摘し、それを補うことを目指す。

第二節では、グライスの意味分析プログラムを紹介する。ここではグライスのプログラムの概要とともに、そもそも分析ということグライスが何を考えていたのかということ論じる。第三節でグライスの理論が抱える問題点を検討する。それは、表現の使用の適切さというものをうまく説明できないという問題点だ。第四節において、グライスの分析の修正を試みる。本稿の提案は、表現の使用(ないし発話)が再生産を介して、互いに関係を持つというものだ。これを分析に取り入れることで、本稿が指摘するグライスの不備は補われるというのが、本稿の中心的な主張となる。

2. グライスのプログラム

グライスは言語の分析に至る一連の意味⁽²⁾分析プログラムを遂行した。それは大きく二段階でなされ、それぞれ(1)話者が何かを意味すること(「話者の意味(speaker meaning)」と呼ばれる)、(2)(言語を含む)表現⁽³⁾が何かを意味すること(本稿では「表現の意味」と呼ぶ)が分析対象となる。そして第一段階では話者の意味が一定の意図を持った話者の行為として分析され(Grice, 1957, 1969)、第二段階では表現の意味が第一段階の分析を介して、人々による行為傾向の共有として分析される(Grice, 1968)。これを順に見ていく。

2.1 話者意味と行為

グライスの見解では、話者意味は一定の意図を伴った話者の行為として分析される。これは、具体的にはどういうことなのだろうか。この節では、グライスによる話者意味の分析の内実を概観する。そのためにまずグライスが実際に提案している分析を紹

介する。次いで、この分析をより正確に理解するため、グライス哲学の解釈に関わる問題に踏み込む。

まず話者意味の分析を紹介しよう。この分析は、「U (発話者) は x を発話することで p ということの意味した」の必要十分条件を求めるという仕方ではなされる。Grice (1957) によると、具体的には次のようになる (p. 219)。

U は x を発話することで p ということの意味した

iff

($\exists A$)(U は次のことを意図して x を発話した :

- (1) A が p と信じること
- (2) A が意図 (1) に気づくこと
- (3) A が、意図 (2) を満たすことによって、意図 (1) を満たすこと)

グライスはこの分析の右辺を「($\exists A$)(U は A が p と信じることを M 意図して x を発話した)」と略す。本稿でも、以後はこの略記を用いることにする。さて、この分析に関していくつかコメントが必要だろう。

1. この分析には「発話する (utter)」という語が現れているが、これは「人為的に拡張された仕方では」(Grice, 1969, p. 92) 用いられており、およそいかなる行為でもここの「発話」となりうる。例えば何かを差し出すという動作や、何らかのジェスチャーも発話に含まれる。

2. 本稿では簡潔さのために、何らかの仕方では聞き手に情報を与えるような (いわば直説法的な) 事例の分析のみを取り上げる。ただし、グライス自身は聞き手に行為を促すような事例 (命令法的な事例) も扱っている⁽⁴⁾。

3. 分析項の内容について。意図 (1) については直感的に理解できるだろう。意図 (2) は、例えば殺人犯が現場に他人のハンカチを残し、警察をミスリードするような事例を排除するためのものだ。意図 (3) が排除するのは、例えば探偵が依頼人に、依頼人の妻の浮気を示す証拠写真を見せるような事例だ。この探偵は意図 (1)、(2) に対応する意図を持つだろうが、写真を見せることで依頼人の妻が浮気しているということの意味しているわけではない。それは単に写真が自然に示すことにすぎない。こうした理由で、上のような複数の意図が必要となる (詳しくは Grice, 1957)。

4. 上の分析はあくまで出発点にすぎず、Grice (1969) では様々な反例をもとに、より正確に話者の意図を特定することが試みられている。だが本稿では Grice (1969) の議論の詳細に踏み込むことはしない⁽⁵⁾。

以上がグライスが提出した話者意味の分析だ。だがここまでの議論では、この分析

の狙いがどこにあるのかは定かでない。そこでここからは、この分析をグライス自身の記述に即して解釈することを試みよう。

そもそも分析とは何だろうか。グライスにとって「ある表現 E の概念分析の探究とは、……E を適用するであろう事例のタイプに対する一般的な特徴づけを探究すること」(Grice, 1958, p. 175) だった。すなわち、分析対象となる概念に関わる表現を取り上げ、その表現が用いられる場面をより一般的な用語で記述すること、これこそがグライスにとっての分析となる。それゆえグライスによる話者意味の分析が示しているのは、「意味する」という表現と「……を M 意図して発話する」という表現とが、まったく同じ事態(ないし行為)の記述に用いられるということなのだ。

意図のような分析項に現れる心理的概念も、この手法と整合的な仕方で捉えられている⁽⁶⁾。もしグライスにとって、心理が主体の(脳状態その他の)内的状態であるなら、上の分析手法との整合性は保ち難いかもしれない。だがグライスにとって、意図や信念のような心理状態はその持ち主の内的な状態ではない。グライスによれば心理的概念とは「理論的概念」であり、素朴心理学の枠組みにおいて行為の説明に用いられるという役割において導入されるものである(Grice, 1975, p. 125-7)。つまり問題となっているのは、主体の内部にあってその主体の行為を誘発するような何かではなく、素朴心理学の内部で行為を記述する際に持ち出されるものなのだ。

これらのことから、グライスの分析が目標としたものを、このように言い換えることができる。意味論的用語で「S は x を発話することで p ということを意味した」と表現される事態は、別のより一般的な用語(すなわち心理的用語)でどのように表現されるのかを明らかにする。グライスの分析が扱っているのはこうしたことなのだ⁽⁷⁾。

こうして、グライスの分析の持つ性格が明確になった。話者意味の分析は、

U (発話者) は x を発話することで p ということを意味した

iff

($\exists A$)(U は A が p と信じることを M 意図して x を発話した)

というものだった。そしてこれは、両辺が同じ事態に対する二通りの記述を与えるという意味での分析であった⁽⁸⁾。

2.2 表現の意味

グライスは話者の意味を一定の意図を伴った話者の行為として分析していた。グライスのプログラムの次なる目標は、この概念を用いて表現の意味を分析するというものだ。それは次のステップを追ってなされる。(1) 特定の個人にとっての表現の意味が、話者意味によって分析される。(2) ステップ(1)で得られた結果をもとに、個人に

とっての表現の意味がその個人の行為の傾向として分析される。(3) あるコミュニティ内での表現の意味が、人々による行為傾向の共有として分析される。そして、こうした分析が、結果的に言語の分析をももたらすことになる。これらを順に見ていこう。

ステップ(1)。議論を明確にするため、この節では表現の意味を「意味_i」、話者意味を「意味_s」とする。このステップでの課題は、「UにとってX(表現)は『p』を意味_iする」の必要十分条件を得ることである。グライスはまず次のように分析する(以下の議論は Grice (1968, p. 124-7) をもとに改変したもの)。

UにとってXは「p」を意味_iする

iff

Uは次の手続きを身につけている：発話によってpということの意味_sしようというときには、Xのトークンを発話する

ただし手続き (procedure) という概念は、別の表現が同じことを意味_iしたり、同じ表現が複数のことを意味_iしたりといったことを許容するようなものとする。また手続きとは話者の振る舞いにおける「傾向 (disposition)」ともされる (Grice, 1967, p. 139)。

ステップ(2)。すでに与えられた意味_sの分析をもとに、ステップ1の結果をさらに分析することができる。

UにとってXは『p』を意味_iする

iff

Uは次の手続きを身につけている：聞き手がpと信じるようUが意図しているならば、Xのトークンを発話する

この分析項には、M意図ではなく単純な意図が現れている。というのも、こうした意図を持って発話する話者は、聞き手が自分の手続きを知っており、それゆえに問題の意図が実現されるということを意図しているであろうからだ。単純な意図さえ分析項に含めれば、表現を用いる個々の場面で話者が対応したM意図を持つには十分なのである(詳しくは Grice, 1968, p. 125)。

この分析が述べていることをまとめると、こうなる。表現が意味を持つとは、聞き手にあるタイプの信念を引き起こそうと意図するときにはその表現のトークンを発話するという傾向を話者が持っていることである。例えば、私のなかである仕方では手を振ることが「私は忙しい」を意味_iするとしよう。グライスの分析によると、これは聞き手に自分が忙しいと信じさせたいときには問題の仕方では手を振るという傾向が私にあるということと同値となる。

ステップ(3)。以上の分析をもとに、共同体で共有される表現についても分析される。共同体における表現の意味は、個人にとっての表現の意味から「帰納的に確立される」(Grice, 1967, p. 138)と言われる。それゆえ、共同体における表現の意味の分析は次のようになる(Grice, 1968, p. 127)。

集団Gにとって、Xは「p」を意味_iする

iff

Gの少なくとも何人か(多く)の成員が次の手続きを身につけている：聞き手がpと信じるよう意図しているなら、Xのトークンを発話する。ただし、Gの少なくとも何人かの(他の)成員がこの手続きを身につけているという想定のもとで、この手続きは保持される。

つまり、同じ共同体に属す他の人々が同じ手続きを身につけているという前提で、多くの成員がある手続きを実際に身につけていること、これが共同体において表現が何かを意味_iするということなのだ。

先に述べたように、手続きとは行為における傾向であった。それゆえこの分析は、表現が意味を持つことと、互いが同じ傾向を示すという前提に基づいて人々が一定の行動傾向を示すことが同値だとしている。つまり表現が意味を持つというのは、ある共同体に属す人々がある行動傾向を共有しているということなのだ。

こうして表現の意味の分析が与えられる。だがこれでは、表現の一種である言語表現の分析には不十分である。なぜなら、言語的意味は他の表現の意味と違い、合成性という際立った特徴を持つからだ。

合成性とは、表現の意味が、その部分の意味とそれらの組み合わせ方によって決定されることだ。例えば「ジョンは亀だ」という表現は、「ジョン」の意味と「亀」の意味、「...は...だ」の意味、そしてそれらがある形で組み合わせられているということによって決定される(もちろんこれは非常に簡略化した議論だ)。これは言語が無数個の有意な表現を持つことなどを説明する、重要な性質だとされる。

グライスは、この合成性をこれ以上分析できない原始的概念と見なすことで、この問題を解決しようとしている。実際、Grice(1968)では「合成的手続き(resultant procedure)」という概念を用いて合成性の説明を図っている(pp. 129-37)。つまり「文Sが『p』を意味_iする」は、上の分析項における手続きを合成的なものとすることで分析されるのだ。ここでは合成性が何らかの仕方で分析されているわけではなく、単に前提とされている。そして表現Xに関するある手続きが合成的であるとは、それが(1)Xの要素であるような個々の表現に関する手続きと(2)統語論的カテゴリーの特定

の並びを体現する表現列に関する手続き（「統語論的手続き」と呼ぼう）との知識から決定されることだとされる⁽⁹⁾。要するに、下位表現に関わる手続き（例えば「ジョン」に関する手続きや「走る」に関する手続き）と統語論的手続き（主語述語文に関する手続き）から、文の意味に関する手続き（文「ジョンは走る」に関する合成的手続き）が導出されるということだ。これもまた、合成性の分析というより、その定義をそのまま導入したにすぎない。

この分析で重要なのは、グライスが言語をより一般的な表現の特殊事例と見ていることである。すでに述べたように、表現の意味は人々の共有する手続きによって、それゆえ人々が行為傾向を共有していることによって分析される。これは言語表現の意味に関してもまったく変わらない。ただ言語表現の場合には、関わる手続き（傾向）が合成的な性質を示しているというだけなのだ。

以上で、表現の意味が行為の傾向によって分析されるのを見た。すなわち、ある共同体においてある表現が意味を持つということは、あることを聞き手に信じさせたければ問題の表現のトークンを発するという傾向が、その共同体のメンバーに共有されているということなのだ。この分析は言語表現にもそのまま適用された。つまりグライスにとって、ある言語表現が何かを意味するというのもまた、人々がある行動傾向（ただし合成的な傾向）を共有しているということなのだ。

2.3 まとめ

グライスの見解をまとめておこう。まず、具体的なコミュニケーションの場で話者が何かを意味するというのは、その話者が一定の意図（M意図）を持って発話を行なうということだった。そして言語やその他の表現はこうした具体的な行為の場面をもとに分析され、結果的に人々による行為の（言語の場合には合成的な）傾向の共有として分析された。

話者の意味の分析については、さまざまな論者が問題を指摘している⁽¹⁰⁾。そしてそのなかにはグライスのプログラムを遂行するためには解決しなければならないような、致命的なものも含まれる。だが本稿で扱うのはそれらの問題ではない。本稿ではむしろ、これまであまり触れられていない表現の意味の分析について、その不備を指摘したい。

3. 表現の意味にまつわる問題

グライスによる表現の意味の分析はある問題をはらむ。このことを示そう。

3.1 表現の適切な使用の問題

表現の意味の分析は、少なくとも次の事柄を説明できなければならない。

1. 表現は何かを意味する。
2. 表現は、それによって意味されることが定まっている。
3. 表現は場面に関わらず、いつでも同じ何かを意味する。
4. 表現には、適切な使用と不適切な使用がある。
5. (特に言語表現の場合) 表現の意味は合成的である。

1、2、3はグライスがまさに分析の目標としたものだ。5については、すでに説明した通り、合成性を原始的概念として認めることで解決されている。では、4はどうだろうか。まず4の内容を説明しつつ、考えよう。

「ジョンは亀だ」という文を例に挙げる。私がジョンが亀であることを聞き手に(何らかの意味で)伝えたいときに「ジョンは亀だ」と発話するのは、適切だと思われよう(これは上の3で挙げられている、表現がいつでも意味する何かだろう)。これに対し、ジョージが好奇心旺盛であることを伝えるために「ジョンは亀だ」と発話するのは、何かおかしなことだと思われよう。ふつうわれわれは、それが適切な言語使用だとは思わない。もちろん、これにはジョンが足が遅いということを伝えようとして「ジョンは亀だ」と発話するような、どっちつかずな事例も存在する。それゆえこの適切/不適切は、決して一意的な区別ではないが、それでも私たちは表現の使用の適切さについてある直感を持っているはずだ。

さて、こうした直感を救うには、私たちは人々が同じ表現を標準的に用いたり、逸脱的に用いたりすると言えなければならない。ここで、本稿がグライスの分析に対して立てる問題はこうだ。グライスの分析は、表現の同一性の基準を与えるのに十分なのか。もしもこれが与えられないならば、表現の使用の適切さに関する私たちの明白な直感を説明できないことになる。表現の同一性基準を与えることは、表現の意味の十分な分析を与えるために必要なのだ。

3.2 表現の同一性

共同体での表現の意味の分析を再掲しよう。

集団Gにとって、Xは「p」を意味_iする

iff

Gの少なくとも何人か(多く)の成員が次の手続きを身につけている：聞き手がpと信じるよう意図しているなら、Xのトークンを発話する。ただし、Gの少なくとも何人かの(他の)成員がこの手続きを身につけている

という想定のもとで、この手続きは保持される。

この分析に従うなら、ある表現と別の表現が同じひとつの表現であるというのは、それらが同じ手続きに関わるということになるだろう。では、ふたつの手続きが同じであるとはどういうことなのか。(もちろんグライスの分析では「Xのトークン」という言い回しをすることで、表現の同一性も手続きの同一性も単に前提とされている。だが私たちが表現の意味を十分に分析したいなら、これは前提とすべきではないだろう。) 考えうる手続きの同一性基準としては、(1) 発話の音的ないし形的な類似性(「表面的特徴の類似性」あるいは「表面的類似性」と呼ぼう)、(2) 発話の際に意図されていることの同一性(ないし類似性)、(3) 手続きを身につけている集団の同一性だろう。

(1) だけでは、明らかに不十分だ。はるかかなたの惑星XXで、XX人が極めて日本語と類似した音、表記、文法を持つ言語を用い、けれど「犬」がコウモリを意味するということはありえるだろう。この場合、日本語の「犬」とXXの「犬」は決して同じ表現ではない⁽¹¹⁾。とはいえ、表面的類似性が表現の同一性に無関係だとは考え難い。

(1)+(2)ではどうか。表面的類似性だけでなく、意図の同一性も持ち出すのだ。再びXX人に登場願おう。XX人は、言語こそ日本語に似たものを使うが、その他の面では日本人と異なっていることが多い。例えばXX人は交通標識を持つが、それは日本のものとは見た目もそれが示す事柄もまるで違う。さて、あるXX人が、XX星の標識のいずれとも異なるある標識を、まったく独自に構想したとしよう。それは、丸い形で、細い白縁のなかは赤く塗られ、その真中に太めの白線が横向きに引かれている。つまり私たちであれば「車両進入禁止」の標識だと判断する外見を持っている。そしてこのXX人は、(ほんの偶然から)この標識は「車両進入禁止」を意味することにしようと考えたとしよう。いま表面的に類似し、関わる意図が同一となるふたつの手続きが得られた。一方は日本の交通標識に関わり、他方はあるXX人が想像した交通標識に関わる。これらは同じ表現であろうか。表面的類似性と意図の同一性からすると、これらはまったく同じ表現である。だが、これは直感に反する。XX人の交通標識は、たまたま私たちの標識に似ているだけだと、通常は考えられるだろう。

そこで、私たちは(2)に代えて第三の候補である集団の同一性を持ち出すか、あるいは(1)と(2)と(3)をすべて持ち出すかすることになる。ここでの問題は、集団なる概念が不明確であることだ。

ひとつの解釈として、表現の意味に関わる集団とは、私たちが「言語共同体」と呼ぶものだという考えがありうる。日本語集団、英語集団などだ。もちろんこれは方言の多様性を無視することになるだろう。だがそれだけでなく、そもそもこうした言語

を共有する集団に訴えることは何の解決にもならないという問題がある。というのも、私たちが知りたいのは、言語が同じであるとはどういうことなのかであり、それを説明するのに同じ言語を共有する集団が共有することと言ったところで、単に循環しているだけだからだ。

もちろん、類似した表面的特徴を持つ発話をする集団などと言っても解決にはならない。これは表面的類似性という基準を再び持ちだしているだけだからだ。

グライスの分析では、これ以上この問題について進むことはできない。では、私たちはどうすべきだろうか。

4. 表現と再生産

この問題は、再生産という概念を取り入れることで処理できるはずだ。

XX 星の標識の例をもとに、表現の同一性について考えてみよう。先の XX 人の標識発明家を取り上げる。彼が、自分の発明はまったく独自になされたと主張しつつ、実はかつて日本に旅行したことがあったとしたらどうだろうか。彼はそこで日本のある標識（すなわち「車両進入禁止」の標識）を見て、それを気に入り、帰星後に自分の発明と称しながらそれを公開したのである。しかも彼は日本滞在中に十分に日本語や他の日本の文化を学び、問題の標識が「車両進入禁止」を意味することを知り、それゆえに自分の「発明品」も「立ち入り禁止」を意味するとしたのだ。この場合、彼が何を主張しようと、この発明家の標識は日本の「車両進入禁止」の標識に他ならないと言いたくなる。だがそれは、彼が「車両進入禁止」の標識を日本で実際に見たからであろうか。

問題の発明家が、今度は日本に行ったことはいちどもないとしよう。代わりに、ある日本人が XX 星に行き、たまたま知り合った発明家に、「日本には『車両進入禁止』を意味する標識があって、それは...という見た目なんだ」と語ったとしよう。そしてその話に感銘を受けた発明家は、その言葉をもとに見事日本の「車両進入禁止」標識と瓜二つの標識を作り、世間に公表したのだ。この場合も、私たちは彼が作った標識が、まさに私たちの知っている「車両進入禁止」の標識だと言うだろう。したがって、表現の同一性に、直接的な知覚経験は必ずしも関わらない。

今度は、ある日本人を考えよう。悪意ある脳科学者によって特殊な操作を受け、彼はあらゆる交通標識を認識しなくなっている。それどころか、彼の脳は交通標識に関わる外部からの情報をすべて遮断するのだ。しかし彼は想像力によって、交通標識というものが世の中にあるべきであり、そしてそれには「車両進入禁止」の標識が含まれるべきだと判断するに至った。そして彼はそれを世に伝えるため、ある標識を実

際に作った。それは外見上、まさに私たちが知っている「車両進入禁止」の標識である。この場合だと、私たちは彼はたまたま同じような標識を作ったが、それは偶然酷似しているにすぎないと言いたくなるだろう。

これらの思考実験は、あることを示唆する。それは、私たちがある表現トークンがある表現タイプの一員と見なすのは、それが別のあるトークンをモデルに発話されたものであるときかつそのときのみであるということだ。ある標識が「車両進入禁止」の馴染みの標識なのは、それが「車両進入禁止」の標識のいずれかをもとにして再生産されたものであるときかつそのときに限る。上の例は、少なくとも私たちがこうした考えへと仕向けるだろう。それゆえ、(いくらかインフォーマルに)問題の分析は次のように修正される。

集団 G にとって、 X は「 p 」を意味 $_i$ する

iff

G の少なくとも何人か(多く)の成員が次の手続きを身につけている：聞き手が p と信じるよう意図しているなら、 X のすでに発話されたトークンと類似した表面的特徴を持った発話をする。ただし、 G の少なくとも何人かの(他の)成員がこの手続きを身につけているという想定のもとで、この手続きは保持される。かつ、この手続きは G の(多くの)成員によって、再生産される。

もし、表現に関わる集団を、その表現を再生産する者たちからなる集団と定義することができるなら、グライスの分析において問題となった集団なるものの不明確さも除くことができる⁽¹²⁾。

集団 G にとって、 X は「 p 」を意味 $_i$ する

iff

G の少なくとも何人か(多く)の成員が次の手続きを身につけている：聞き手が p と信じるよう意図しているなら、 X のすでに発話されたトークンと類似した表面的特徴を持った発話をする。ただし、 G の少なくとも何人かの(他の)成員がこの手続きを身につけているという想定のもとで、この手続きは保持される。かつ、 G はこの手続きを再生産する者の集合である。

結局のところ、グライスの分析の不十分さは、表現の同一性を単に前提とするか、もしくは集団の同一性に求めるかしかないというところにある。その分析では、表現の発話同士が持つ関係を捉えようとはまったくしていないのだ。それが表現の同一性

について、ひいては表現の適切な使用と不適切な使用の区別について、十分な説明を与えられない原因となっている。本稿が試みたのは、そうした表現の発話のあいだの関係を考察してみるということだ。そしてそれを分析に含めることで、グライスの分析をよりよいものにすることができる。

5. 結論

グライスのプログラムは、二段階で意味を分析しようとした。すなわち、まず話者の意味を話者の意図によって分析し、さらに表現の意味を話者の意味によって分析しようとしていた。これにより、表現の意味は心理的用語によって説明されることとなる。だがグライスによる表現の意味の分析には、表現の使用の適切／不適切を説明できないという不十分さがあった。そしてそれは、表現の同一性をうまく扱えていないということに起因していた。本稿では表現の同一性に関するいくつかの思考実験をもとに、表現の同一性の基準を再生産によって与えることを提案した。さらにそれをグライスの分析に加えることによって、表現の意味について、よりよい分析を与えることを試みた。

註

* nyt.miki@gmail.com

(1) 物理主義へのグライスの哲学の利用については Schiffer (1972)、言語に関する自然主義としては Millikan (2005) を参照せよ。

(2) ここでの「意味」は、グライスにおける「非自然的意味」のみを指す(詳しくは Grice, 1957)。

(3) グライスは「発話タイプ (utterance type)」という表現を好むが、本稿では「表現」とする。

(4) 命令法的な事例については、分析項に現れる「p と信じる」を「p と意図する」に代えることで同様の分析が与えられる (Grice, 1969, p. 105)。

(5) この点に関してもっとも問題となるのは、話者の意図の無限後退である。それは、反例を排除するために話者の意図を増やしても、まったく同じ仕方で反例が構成されるような、そうした反例構成方法があるという問題だ。これにより、どれだけ多くの意図を話者が持っていたとしても反例が作られうることになり、結局話者の意図は無限後退に陥ることになる。したがってグライスの分析は決して十分なものとはならない。

この問題については Avramides (1989) に詳しい。Schiffer (1972) は相互知識 (mutual knowledge) という概念を持ち出すことでこの問題を回避しようとした。Harman (1974) はシフアーを批判しつつ、似たような方法で問題の回避を試みている。Grice (1969) では、これらとは異なる仕方での解決を提案している。

(6) グライスの哲学が持つこうした体系性については、三木 (2009) で論じた。

(7) それゆえ、この分析は少なくとも直接的には存在論的ないし認識論的な還元を行なうものではない (Avramides (1989) も参照)。もちろんこれは、グライスの本心はどうあれ、グライスの分析を還元主義的な立場のサポートに利用することを妨げはしない。還元主義的立場の一種である物理主義へのグライスの利用については Schiffer (1972) を参照せよ。ただしグライス自身は物理主義に反対している (Grice, 1991) し、広く還元主義とも距離を置きたがっている (Grice, 1987)。

- (8) グライスはときに観念説の現代版を擁護したとされる(例えば Lycan, 2000)が、本稿の議論からわかるようにそうした解釈は誤りだ。問題は意味という存在者がどのようなものかではなく、意味するという行為の他の表現を用いた特徴づけなのである。
- (9) 合成的手続きにせよ統語論的手続きにせよ、グライスがそういったものを原始的な概念とする以上、その位置づけについては柔軟に対応することができる。統語論的手続きが生得の生成文法によって与えられるのか(cf. Pinker, 1994)、個体発生的に習得されるのか(cf. Tomasello, 2003)は、グライスの分析に影響はしない。そしてこのどちらを採用するかは経験的な問題だと思われる。
- (10) すでに注で挙げている話者の意図の無限後退の問題のほかに、聞き手が存在しない意味の事例や、聞き手の信念形成が話者の意図の認識に依存しない意味の事例などが(グライス自身も含め)多くの論者に挙げられている。詳しくは、Grice (1969)を参照せよ。
- (11) ここでは語を例に使ったが、同じことは文に関しても言える。
- (12) これは Millikan (2005) などが取る方針だ。

文献

- Avramides, A. (1989). *Meaning and Mind: an Examination of Gricean Account of Language*, Cambridge: MIT Press.
- Grice, P. (1957). 'Meaning,' in Grice (1989), 213-23.
- (1958). 'Postwar Oxford Philosophy,' in Grice (1989), 171-80.
- (1967). 'Some Models for Implicature,' in Grice (1989), 138-43.
- (1968). 'Utterer's Meaning, Sentence-Meaning, and Word-Meaning,' in Grice (1989), 117-37.
- (1969). 'Utterer's Meaning and Intentions,' in Grice (1989), 86-116.
- (1975). 'Method in Philosophical Psychology,' in Grice (1991), 121-161.
- (1987). 'Retrospective Epilogue,' in Grice (1989), 339-85.
- (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press, (清塚邦彦訳, 『論理と会話』, 勁草書房, 1998年)。
- (1991). *The Conception of Value*, Oxford: Clarendon Press.
- Harman, G. H. (1974). 'Review of *Meaning* by S. Schiffer,' *The Journal of Philosophy*, 71, 7, 224-229.
- Lycan, W. G. (2000). *Philosophy of Language: a Contemporary Introduction*, New York: Routledge, (荒磯敏文・川口由起子・鈴木生朗・峯島宏次訳, 『言語哲学 入門から中級まで』, 勁草書房, 2005年)。
- Millikan, R. G. (2005). *Language: a Biological Model*, Oxford: Oxford University Press.
- Pinker, S. (1994). *The Language Instinct*, New York: William Morrow and Company, (椋田直子訳, 『言語を生みだす本能(上・下)』, 日本放送出版協会, 1995年)。
- Schiffer, S. (1972). *Meaning*, Oxford: Oxford University Press.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a Language*, Cambridge: Harvard University Press, (辻幸夫・野村益寛・出原健一・菅井三実・鍋島弘治朗・森吉直子訳, 『ことばをつくる: 言語習得の認知言語学的アプローチ』, 慶応義塾大学出版会, 2008年)。
- 三木那由他(2009). 「理性による意味の基礎づけ」, 『哲学論叢』, 第36巻, 68-79頁。

[京都大学大学院博士課程・哲学/日本学術振興会特別研究員]